

今回はご家族と帰国するというタイミングで連絡があり、浅草でご家族ともども食事をしました。ご家族とタイ語で話をしていて、それだけでもかっこいい。

実は、現代でなかったらこの再会はなかったんです。何年前かにSNSで繋がりが、それで今回連絡が取れました。いやあ、SNSってすごいですね。

それにしても45年、小学生時代に別れたきりだったのにすぐに分かりました。お互い「おお、変わらな いねえ」なんて。ちなみに自分が若い頃、高齢の方が、「昔と全然変わ らないねえ」なんて話をしているの を聞いて、「そんなことはないだろ う！」と思っていましたが、私も十分に高齢者の仲間入りをしていまし た。

次に会うのはタイで！と約束して別れました。東南アジアへ行ったことがないので今から楽しみです。

痛みと治療の量

歯医者になったときからずっと悩ましいことがあります。それは、患者さんの痛みの程度です。痛みに客観指標はないので、患者さんの表現でしか知ることができません。とは言え、わかるとは思いますが「ちょっととした痛みでも「痛い！」と叫ぶような方もいるし、治療中患者さんの顔面から脂汗が出てきているのを見て、すごく痛いのを我慢していたことを知るということもあります。もち



ろんどちらが良い、悪いという話ではありません。

問題はそこではなくて、それに対する治療の方です。やはり、痛みを多く訴えるの方が治療量は多くなります。あまり訴えない方だと、「これくらいの状態なら様子を見ましよう」と言って経過をみるような時でも、目の前で痛いと言われたら、神経を抜いたりしなければならいこともあります。要は、患者さんの訴え方によって適切な量の治療ができていない可能性があるのです。やり過ぎたり、足りなかったり。先日、ふとそんなことを思って、ぞっとしました。

この問題は、痛みを測れる装置が出てこないと解決しない問題だと思えました。なかなか医療の客観化は難しいです。